

今回の「草創期を語る」は、財団法人永頼会が設立した松山中央乳児保育園の歴史を振り返ります。また、昨年 12 月に財団設立 50 周年を記念して盛大に開催された永頼フェスティバルの様子をお伝えします。

草創期を語る Vol.3



永頼会もうひとつの歴史 ～松山中央乳児保育園の設立とあゆみ～



財団法人永頼会設立の3年後より松山市民病院とともにその歴史を歩んできた松山中央乳児保育園は、昭和42年9月1日に開園して以来、今年平成27年に48年目を迎えた。今回は保育園の設立前から45年間勤め、乳児保育の礎を築いてこられた坂本君枝初代園長にお話を伺い、永頼会の温情に触れながら歩んできた保育園48年の歴史を辿ってみようと思う。

昭和40年代に入り、高度経済成長期で女性の社会進出が盛んになり、共働き家庭の増加とともに乳児保育のニーズが高まってきた頃、県下にも乳児保育園が設置されることになった。0歳児、特に産休明けの子どもは抵抗力が弱く、危険も伴うため県市で様々な議論の末、名乗りを上げた1つが永頼会であった。

当時、県会議員で永頼会の副理事長でもあった岡本博氏が先頭に立って行政へ働きかけ、市民病院の看護婦雇用対策ということもあって、園の設立に尽力してくださった。

ちょうど土居田保育園で主任保母として勤めていた坂本君枝さんに白羽の矢が立ち、園長として引っ張ってこれ、園舎の設計、設備、備品等、すべてに携わ

ることとなった。手本となるものが何もない中、当時採用された14名の職員が心をひとつにして、環境設定・保育内容について会議を重ね、5か月にわたる準備研修期間を経て開園に至った。

開園当初は定員60名のところ申込者200名、300名となり「東大に入るより(入園が)難しい」と言われていたそうだ。女性社会進出の勢いある時代背景がうかがえる。女性の働き方も生活のために働くスタイルから自分の専門性を生かした働き方が増えてきたようだ、と坂本初代園長は振り返る。

さて、この50年の間に、子育て家庭のニーズの多様化に伴い、保育制度も大きく変革した。乳児保育に関しては、0歳児6名に保母1名という受持ち定数も昭和48年には県市単独補助による1名の保母が増員となった。昭和51年には乳児特別対策施設として承認され、保母1名の増員となり、平成元年からは0歳児3名に保母1名となった。

今では各園で当たり前に取り入れられるようになった保育事業(乳児保育・障害児保育・延長保育・一時預かり事業等)についても、長い歴史の中でこうした国県市への働きかけを繰り返したこ

とで、保育内容が少しずつ充実してきたのである。

松山中央乳児保育園は平成26年8月に社会福祉法人永頼会へ移行し、山本祐司理事長新体制の下、現在園舎は改築工事中である。木造2階建ての新園舎には木のぬくもりの中で親子が集え、子育て相談ができるスペースがあり、時代のニーズに合った設備環境が整えられつつある。

大家族世帯が多く、地域全体で子どもをみていた時代から、女性雇用に伴い共働きが増え、かつ核家族化が進む現代となった。「子ども」本来の姿は昔も今も変わりなく無邪気である。

国の子育て政策にも期待する一方で、保育の基盤は家庭にあるという思いを確かめながら、園と家庭とが協力し合い、子どもの豊かな育ちを保障していくことが重要である。

永頼会50周年の節目にあたり、平成27年度からは国の子ども子育て新制度も始まり、新たなスタートを切ろうとしている松山中央乳児保育園―「萬世永頼」の精神のもと、地域に根差した保育園としてこれからも発展し続けたい。

(文:園長 安藤かおり)



昭和 42 年
開園当初の園舎

1階が乳児保育園、2階から上は会議室、看護実習室、看護婦宿舎(ひとみ寮)として利用された。周りにはまだ田圃や池が残っていた。



昭和 55 年 宮田信照 前理事長就任
遊具寄贈式

写真左より、
岡本博氏、坂本君枝初代園長、
宮田信照前理事長、香川県前事務長



秋祭り(薬師寺真初代永頼
会理事長の胸像の前で)

神輿は岡本氏が寄贈してくださり、今でも奥様が遺志を継いで、毎年お祭りの日には子どもたちにお菓子をプレゼントして下さっている。



対談の様子

写真左より、
山本祐司理事長、花本雄二
事務長、安藤かおり園長、
坂本君枝初代園長